

●次回予告

おとなようき
大人揚棄
～次代の版画展～

会 期 2004年9月3日(金)→9月15日(水)
12:00→18:00日曜休館 入場無料
会 場 名古屋芸術大学アート&デザインセンター Gallery BE+be

同時開催:「盗難美術館」「O計画～盗まれた名古屋～」
各地域に住む大人揚棄メンバーと一般の方々が、名古屋のイメージをそれぞれ個人の考え方により盗み、盗難美術館に寄贈展示します。

「次代の版画」展は1994年に京都精華大学と名古屋芸術大学の交流を目的とし、両大学の院生、研究生が自主企画し運営する展覧会です。

今年、名古屋芸術大学版画コース大学院2年生を中心に全国から同世代の13作家が集まり、「大人揚棄 ～次代の版画展～」として、札幌・名古屋・神戸の三都市で巡回展を開催することになりました。

巡回展 ●CAP HOUSE (神戸)
10月7日(木)～13日(水) 11:00-20:00 Tel.078-230-8707
●PRAHA Project (札幌)
11月1日(月)～30日(火) 11:00-18:00 Tel.011-513-0977



●秋の企画展

荒川修作+マドリン・ギンズ
～ARCHITECTURE AGAINST DEATH～
『宿命反転都市』考

会 期 2004年10月30日(土)→11月20日(土)
12:00→18:00日曜休館 入場無料

会 場 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
●オープニングトーク
10月30日(土) 15:00～ B棟大講義室
対談 荒川修作 & 馬場駿吉 (俳人・美術評論家)

自分の家が魔法の箱になって、不思議な現象や思いがけない出来事が毎日起こる!?

「養老天命反天地」でも知られる芸術家・荒川修作(1936年名古屋生まれ)、2005年に向けて名古屋市と三鷹市(東京)で、集合住宅のプロジェクトを進めています。

本展では、夫人のマドリン・ギンズとともに荒川が提唱する「宿命反転」の思想を、CG/パネルや模型を通じて紹介します。



志段味循環型モデル住宅 (名古屋守山守山区)

基本構想のイメージ



OTONAYOUKI
http://otonayouki.fc2web.com/
〒411-1115(水) 12:00-18:00
〒411-1115(水) 12:00-18:00
IWASAKI yuko
OHNO yuiko
SATO junko
KAWASHIMA tokiko
KISHI yuki
TAKASU ken'ichi
TOMINAGA toshihiko
MURATA suiko
FUJISE shoko
MITSUMORI kazuo
TASUDA yuhiko
TANAMOTO yuki
web



Art & Design Center

特集

Volunteer

Give & Takeのボランティア
— work as a volunteer —

Steering committee
MEMBER

H16年度
アート&デザインセンター
運営委員会メンバー

センター長 神戸 峰男
委員長 高橋 綾子
副委員長 藤松 由美
委員 岩井 義尚
瀬田 哲司
須田 真弘
池側 隆之

A&Dセンター 江坂恵子

○編集後記

今回の特集では「ボランティア」を取り上げました。ボランティアは参加する側の意識だけでなくそれを必要とする側の意識も重要だと思っています。参加者を単に人手と考えるのではなく、お互いを尊重しあうことによって双方でのGive & Takeの関係が得られるのではないのでしょうか。

(江坂)

学生生活の幅を広げるひとつの方法としてボランティア活動への参加が挙げられる。実際には大学での課題の忙しさやアルバイトなどでなかなか積極的には動けないのだろうが、社会参加への第一歩としてボランティア活動へ目をむけてみてはどうだろうか。

阪神・淡路大震災時のボランティア活動の報道以来、我が国でも急速にボランティア活動に対する意識が高まっている。それを受けてか、多くの大学で「ボランティア論」なる講義が行われるようになり、「学生ボランティアセンター」が設置されるようになった。さて、この「ボランティア」とは一体何であろうか。ここで簡略にその概要を整理してみたい。まずボランティアとは、その語源にも由来するように「自由な意志で決意すること」を基礎としている。つまり、自発的な活動であるということである。また、ボランティアには、個人なり集団なり必ず相手が存在する。従って、相手の状況を正確に認識し、押し付けになったり、「やってあげる」的にならないということも、「ボランティア活動」を理解する上では大切なことである。このことに附随して、相手がいるということから、相手に対する「責任」も発生するというのも忘れ



てはならない。つまり、義務ではないが責任はある。また、ボランティア活動は、自分の持っている知識や技能を相手に対して提供するわけであるから、ボランティアをする人は、学修や研鑽を積み、一層自らを高める努力を必要としている。さらにボランティア活動の対象となる相手からも人間的影響を大きく受けることも考えれば、ボランティア活動をすることによって自らも大きく成長するチャンスを得ることができる大切な活動であるという事ができる。

ここで私なりに簡略にボランティア活動を定義すると、「社会的に弱い立場や状況にあって困っている人や集団に対し、その課題の解決に

向かって、無償で、しかも自発的に支援することによって問題解決に取り組むこと」とでもなるか。

ボランティア活動は、あくまでも自発的な意志によって自分の思いや願いを行動に変える行為なので、その達成感もひとしおであり、心地良いものとなるだろう。学生時代に、自分を磨くためにも、深く社会や人を理解するためにも、自分の持っている技術・技能や経験を生かしてボランティア活動に携わってみるということを提案してみたい。 石田直章(音楽学部教養部会 健康科学)

口笛吹いて疾走する。そんな風にデザインしたい。



9→11月

EXHIBITION SCHEDULE



アート&デザインセンター 展覧会スケジュール

大人揚棄(おとなようき)次代の版画展—	9月 3日(金)～9月15日(水)
犬飼千絵 + 大滝加与 展	9月 10日(金)～9月15日(水)
G-U (ソフトスカルプチャーへVol.5)	9月 21日(火)～9月29日(水)
幼稚園児たちのゲイジツ展	10月 1日(金)～10月 6日(水)
宇野 亜喜良 ポスター展	10月 8日(金)～10月13日(水)
古美術研修デッサン展	10月 8日(金)～10月13日(水)
エンク・デ・クラマー展	10月15日(金)～10月27日(水)
秋の企画展 荒川修作 + マドリン・ギンズ『宿命反転都市』考	10月30日(土)～11月20日(土)
後期留学生作品展	11月26日(金)～12月 1日(水)

Open 12:00～18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝祭日休館 [入場無料] どなたでもご覧いただけます。

交通のご利用

●最寄り交通機関をご利用の場合名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重駅下車西へ約1,000m徒歩15分。
●急行電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください。西春駅から北西2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります。
●自動車ご利用の場合
一宮インターから10分、名神小牧インターから15分、名古屋空港から10分



特集

Give & Takeのボランティア

work as a volunteer



ポスター制作の様子(版画研究室)



レセプションでのカフェボランティア

アート分野でも、様々なボランティア活動が行われています。展示会やプロジェクトの運営やワークショップのアシスト、美術館でのボランティアなどでは専門的な知識を持った人たちの参加も目立ちます。

アート&デザインセンターにとってもボランティアスタッフは欠かせない存在です。6月に開催された春の企画展『imperfect ミナ ヘルホネンのクリエイティビティ』でも多くの学生がボランティアスタッフとして活躍してくれました。

この展示会では、企画の段階から学内で対応できることは可能な限り学内でやっていきたいという意向を皆川 明氏やスタッフの方々と話していました。現実にはポスター制作や展示用の什器制作、会場設営などは専門家に頼んだ方が早く正確にできるのですが、大学ギャラリーでの展示ということや予算の問題もあり、手間や時間のロスを感じて準備を始めました。結果的には学内の木工房・メタル工房・印刷工房・版画研究室の技術スタッフの全面協力を受け、学生ボランティアとの共同作業によって準備が進められました。会場設営

では、皆川氏とミナ ヘルホネンのスタッフを中心にボランティアスタッフも一緒に空間を創りあげていきました。

今回の活動を通して、参加者がボランティア活動に何かの価値を見い出してくれたのだとしたら幸いです。

ボランティアスタッフからこぼれてきたコトバ

「(自分にとっての)メリットがわかりやすいほど参加したくなる。」

「おもしろかった」

「観客の反応や様子を見ていて愛があふれていると感じた。」

「ミナ ヘルホネンだからどうしても参加したかった。」

「アルバイトで手伝うのとはまったく違った意識。」

「緊張感が心地良かった。」

「芸術生にとっちは『ものづくり』の人に興味がある。」

「今まであまりボランティアという意識はなくいろいろなことに参加していた。割と自然なことだった。」



会場設営の様子



設置を終えてミナ ヘルホネンスタッフの皆さんと

トピックス TOPICS レポート

西村正幸 展 2004年7月2日~25日 ギャラリーAPA/名古屋市



嵐の後、枯れ枝や若枝が強風に折られて落ちてしまうように、戦地の年老いた者、幼くか弱い者～声なき少数派<silent minority>～は傷を負い、命を落とす。表現者として、このようなsilent minorityを代弁する作品を作らなければならないと思う。木箱の中に、隠喩となるモチーフを置き、その回りに枝を敷き詰めた。

米国メイン州に住む13歳のシャーロット・アルデブロンは、2003年3月3日に地元の教会で開かれた平和集会で、“What About the Iraqi Children?”と言うメッセージを読み上げた。戦争に巻き込まれ、不必要な死を迎えようとしている幼子に、わずか25ドル分の薬があれば<with just 25\$ worth of medicine>完治するのに語るスピーチに、心が揺さぶられ、その必要な25ドル分のベニシリンを木箱に入れ、この6つの言葉一つ一つがランプに照らし出される壁一面の作品も制作した。

かつて、チリの軍事政権下で捕らえられ虐殺されたシンガー・ソングライター、ヴィクトル・ハラ Victor Jara が歌った、「一つの水飲み場がよい。そこに様々な人たちが集って、共に水を分かち合って飲むことが・・・」という言葉が今のこの世界に響く。aqua(水)と言う言葉もモチーフになった。

美術学部版画研究室助教 西村正幸

フィリップ・ブース個展 2004年6月14日~26日 Westbeth Gallery Kozuka/名古屋市



この展示会は、個別でありつつ関連づけられた3つの作品群で構成されています。ほぼ15年間という長い歴史を持ち、絶え間なく発展してきた作品群と、ここ2年ほどの間に互いに呼応しあい発展してきた2つの作品群です。

第1の作品群の15年という期間は、1つの流れを維持するには長すぎるように思われるかもしれませんが、すべてのアイディアがそであるように、個々の作品の持つ潜在能力は無限であり、制作の過程では自然なことだと思っています。この作品群は風景との相互作用を起源としていますが、正確には風景からの抽出といったほうがよいのかもしれませんが。これらは既知の形の中に新しい精神を見出すためにずっと行ってきた観察に基づく研究から生まれたものです。

あとの2つの作品群自体は比較的新しいものですが、初期の作品群で制作したものを起源としています。第2の作品群は風景を示唆する形態が含まれていますが、初期のドローイングから直接構成的に発展させたもので、観察から生み出されたものではありません。

最後の作品群は、ギリシャの博物館で雑然と積み上げられていた破片などからイメージして制作したものです。私はその組織されていないディスプレイに興味を持ちました。このようにして作られた構成要素が、間違った歴史や関連性を創り上げており、答えの数ほど多くの問いかけを生むこととなります。この作品群ではギリシャ建築や美術からの引用やイメージを用いて制作をしています。

展示会というのはいつも満足感とともに何かしら意気揚々としたり落ち込んだりといった複雑な感情を引き起こしますが、私たちはそれにとられるよりも、展示会の終了後の「次の展開」を考えなければなりません。それは自分の作品に対してより強い客観的見地をとり、より新しい方向性を感じ取るために有意義な時間となっています。この展示会は私に、新しい作品への可能性を確認させてくれると同時に初期の作品に対して新たな扉を開けてくれました。

デザイン学部教授 フィリップ・ブース

AKIMAHEN! Lille2004 2004年5月18日~6月27日 フランス・リール市

本学卒業生3名(徳重道朗・百合草尚子・岡本健児)も参加した日本の現代美術を紹介する展示会がリール2004(欧州文化首都リール2004)というイベントの一環として開催された。

展示は市内ワゼム地区の廃工場を利用したアートスペースで行われ、出品された作品はイボン・ランボルトのコレクションを中心としたもので、河原温、荒川修作、荒木経惟、内藤礼、草間弥生、村上隆、ヤノベケンジ、小沢剛、やなぎみわ、森万里子などが含まれている。今回はそのコレクションに加え、ロンドン在住のさかわりきをはじめ、海外在住の日本人作家や上記3名を含めた同時代性の高い芸術活動を展開しているアーティストたちが集った。

リール2004は、2004年の欧州文化首都として、2003年12月6日から一年間にわたって文化イベントを行っている。この期間に世界中からアーティストやクリエイターたちを招き、住民との相互浸透を図っている。中でも極東の現代美術を紹介する『AKIMAHEN! あきまへん!』は、大きな注目を集め、地元新聞にも数回にわたり取り上げられた。

今回参加した岡本健児に印象を尋ねたところ、「思っていたよりも大きなイベントで、自分がその場に参加していることが信じられなかった」そして、「現地のオーガナイザー、ボランティア等運営スタッフの温かいもてなしにとっても感謝している」とのこと。この展示会はリール市で開催された後『EIJANAIIKA ええじゃないか』としてアヴィニヨンでも展示される。



AKIMAHEN : <http://www.lille2004.com/>
EIJANAIIKA : <http://www.collectionlambert.com/>

RELAY ESSAY 人体写生と女性モデル

西洋絵画の学校教育は、古典古代の彫刻に基づくデッサン、実際のモデルの写生、解剖学の研究の三つを中心に組織された。現在ではヌード像という女性が一般的だが、現実には女性のモデルが用いられるようになったのはそう古いことではない。私は今年度より科学研究費補助金の交付を受け、「美術アカデミーにおける女性ヌードモデルの導入および裸体素描の理念に関する研究」を行っている。今日、アカデミーという語には保守的で創造性の枯渇したというニュアンスが付きまわっている。が、フランスにおける1648年の王立絵画彫刻アカデミー設立時の最大の呼び物は裸体モデル(実際には男性のみ)を提供する素描教室の開設であり、人体写生こそが形骸化したマニエリスムを乗り越えることができると考えられ、多くの生徒を集めたのであった。ところで、美術学校に大っぴらに女性の裸体モデルが導入されたのは、国により違いがあるが、イギリスでは17世紀末、フランスでは18世紀末

栗田秀法

のことであるといわれ、かなり時代が下る。ルネサンスの個人のアトリエでも女性の裸体モデルは一般的ではなかったようで、例えばミケランジェロのシステーナ礼拝堂の天井画の巫女たちの準備素描を見てみると、明らかに男性のモデルに基づいた写生がなされているように見えないであろうか。以前勤務していた美術館でフランス近世の素描展を組織した際、出品作の中に女性のモデルが使用したクッションがそのまま描きこまれているものがあつた。これは明らかに女性モデルが用いられたことを示す例であるが、女性のヌード素描にはそういう手がかりがなく、想像で描かれたものか、写生したものかの判断が難しいものも数多くある。今回の研究ではできるだけたくさん作例を集め、教育や制作の現場における女性モデルの導入の初期の状況の一端を明らかにし、また古典主義の美学における模倣と理想の問題に取り組むことができると考えている。 美術学部美術文化学科(西洋美術史)